

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007 ～ 2009  
 課題番号：19720224  
 研究課題名（和文）日本における国立公園の風景地選定とナショナリズム・観光・自然保護の  
 関係性  
 研究課題名（英文）The selection of landscape area for nation park in Japan and its  
 relationship with nationalism, tourism and nature conservation

研究代表者  
 神田 孝治（KANDA KOJI）  
 和歌山大学・観光学部・准教授  
 研究者番号：90382019

研究成果の概要（和文）：日本における国立公園の風景は、戦前期についてはナショナリズムとの関係性から山岳的風景地が選定されてきたことが指摘されてきた。しかしながら、瀬戸内海国立公園や吉野熊野国立公園の事例から、海国日本を代表する風景として海岸の風景地も国立公園に選定されていたことが認められた。また山岳ではあっても、台湾の大屯国立公園のように、国家を代表する風景地としての価値ではなく、日本人としての心身維持のための休養地として選定された場所があったことも認められた。これらから、戦前期における国立公園の選定において、ナショナリズムと風景の関係は画一的ではなかったことが判明した。また、こうした国立公園の選定にあたっては、特に戦前期においては、自然保護がしばしば軽視される一方で、現地の観光地化と密接に結びついていたことも確認された。

研究成果の概要（英文）：

Generally speaking, it has been pointed out that mountain landscapes were selected for national park as a symbol of nation in the prewar period of Japan. However, in the case of the Setonaikai National Park and the Yoshino-Kumano National Park, I confirmed that seashore landscapes areas were also selected for national park in the same period, because these were regarded as a symbol of maritime nation Japan. Moreover, the Daiton National Park in Taiwan, which was mountainous site, had no landscape value as a national symbol but value of the rest place for maintaining body and soul of Japanese during the Japanese colonial period. Thus, the relationships between landscapes and nationalism were various in the selection of the national parks in the prewar period of Japan. Finally, I found that the selection of national park in Japan, especially in the prewar period, tended to pay little attention to nature conservation, but had a close relationship with tourism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	390,000	2,590,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：風景、国立公園、ナショナルリズム、観光、自然保護

### 1. 研究開始当初の背景

近年の地理学の観光研究は、文化の問題において広く学際的議論との対話がなされ、かつ文化地理学における議論をベースに観光研究に新たな視点を提供するようになってきている。特に文化ポリティクスとの関係は観光と密接な関係があるものとしてしばしば検討されており、こうした問題について考察するにあたっては国立公園が重要な研究対象となる。

この国立公園の特徴について、文化地理学的視座からナショナルリズムとの関係が指摘されており、日本の戦前期の国立公園は、国家を代表する風景として山岳的な風景地を選定したことが論じられている。しかしながら、この問題に観光がいかに関係していたのかについてはあまり議論がなされていなかった。また、国立公園については開発としての観光と自然保護との関係性もしばしば議論されており、自然保護の問題も重要な論点である。

そこで本研究では、日本における国立公園の風景地選定において、観光とナショナルリズム、そして自然保護がどのような関係を有していたのかを検討することにした。

### 2. 研究の目的

日本の国立公園の風景地選定において、観光やナショナルリズム、そして自然保護といった問題が、それぞれどのような影響を与えていたか、その過程を歴史的、空間的な変容に注目して考察することを目的とする。

### 3. 研究の方法

雑誌『国立公園』をはじめとする国立公園関係の文書資料や、各々の国立公園に関係する様々な文書資料を収集し、そこに記されている言説を分析する。

### 4. 研究成果

日本における国立公園の風景地選定の特徴を明らかにするために、特に周縁的な事例に注目することにした。そこで、田村剛が戦前期の国立公園風景の多様性として言及した、社寺や史蹟などの人文的風景、多島海や河川・海岸を主題とした風景、大風景地とい

うよりは休養地として意味がある地域、に焦点をあてることにした。

(1) まず、海洋や海岸を主題とする風景地の国立公園選定について考察した。このような風景地を有する国立公園は、瀬戸内海国立公園と吉野熊野国立公園の二カ所があったが、瀬戸内海については小豆島・屋島、吉野熊野については大台ヶ原が、1923年の衛生局案において国立公園候補地とされていたことが確認された。当初は両地域共に山岳的な風景地だけが国立公園の候補地とされていたのであり、海洋や海岸地域の国立公園の指定へ向けた議論は、実質的には1931年に入ってから始まったことが認められた。これは、「山岳美や湖沼の美を中心とする勝景地のみに偏することなく広く海洋の美を抱擁する地域を選定すべし」(国立公園3(9), 1931.)という声を受けたものであり、海国日本の象徴であることや史蹟が豊富であることが指摘されるなかで、海域が山岳と同じくナショナルリズムと親和的な風景地として位置づけられて選定されたことが判明した。

また、こうした海と関わる風景地の国立公園選定へ向けた動きは、国民精神の昂揚と国民体育の向上を強力に求めた戦中期に加速していたことについても確認された。戦中期は、日本国民としてふさわしい心身を形成するために、都市近郊の国立公園の設置が計画されるなかで、山岳の大風景地ばかりでなく、海岸島嶼も包含した国立公園が目指されるようになった。そのため、国立公園協会は1941年に国土計画対策委員会を設立して「国土計画と休養地」についての審議を行い、1942年に発表した新たな6つの国立公園候補地には大島天城と志摩という2カ所の海岸島嶼部を含む風景地を選んだのである。

さらに、これらの国立公園の選定が、地元地域の観光地化や観光資源の生産に密接に連動していたことについても確認した。瀬峡や那智の滝が観光資源として注目されていた熊野においては、吉野熊野国立公園の指定によって、瀬峡と共に熊野海岸が観光資源として注目され、那智の滝についてはあまり言及されなくなるという事態が発生していたことが認められた。また和歌山市近郊の海岸部については、第二次世界大戦の戦災で市街地に大きな被害が及ぶと、観光地としての海

岸に注目が集っており、そのなかで昭和 25 年に観光開発が進む加太・友ヶ島から雑賀崎・和歌浦が瀬戸内海国立公園に編入されるという、観光振興との密接な関係性が確認された。さらに GHQ 指揮で戦後初の国立公園として昭和 21 年に指定された伊勢志摩国立公園は、伊勢神宮の保護を目的に志摩の真珠保護を名目に選定されたものであるが、それが国家の聖地としての神都から、日本人の心のふるさととしての観光都市への伊勢の変容に大きな影響を与えていたことが判明した。

(2) また本研究では、田村が大風景地ではなく休養地であると指摘した台湾の大屯国立公園を中心に、(亜)熱帯の環境論と国立公園の関係についても検討した。台湾における国立公園は、1937 年に大屯、次高タロコ、新高阿里山の 3 カ所が指定されており、これらはすべて山岳的な風景地であった。しかしながら、山岳とはいえ大屯は、日本の国立公園における最小面積という規模の小さなどころであり、さらには 1927 年に台湾日々新報が人気投票で選定した台湾八景には域内のどこも選ばれていないという、大風景という点でも風景美に関しても疑問が生じる場所であった。また、当時の台湾において観光客に人気があったのは山岳ではなく(亜)熱帯の風景地で、台湾八景の一番人気も熱帯風景を特徴とする台湾最南端に位置する鷺鑾鼻であった。そのため、台湾帝国大学教授の早坂一郎は、1936 年に開催された台湾国立公園委員会などの場で、大屯の国立公園としての資格に疑義を呈すると同時に、鷺鑾鼻を中心とする熱帯風景地こそが国立公園にふさわしいということを、台湾の象徴という点や内地からの観光客誘致に役立つことを理由として主張していた。しかしながら台湾総督府の役人や田村剛は、「国民の剛健なる思想並びに体育増進」を図るために内地でも山が選定されていることや、3 箇所という国立公園の数が内地の基準に適合しているということなどに言及し、こうした意見を聞き入れることはなかった。

このように大屯を含む山岳風景地のみが台湾で国立公園とされた理由は、実際には単に内地の基準が適応されたのではなく、悪環境の(亜)熱帯においては山岳が日本人としての心身回復の聖地としての役割を果たすと考えられていたことがあった。台湾において国立公園選定の動きが生じると、大都市の台北に近い山岳の大屯一帯を国立公園とし、台湾住民の心身退化を防ぐ場とすべきであるという意見が盛んに述べられるようになっていたことが確認される。そしてこうした考えは、台湾における国立公園の候補地を選定した 1934 年の会議でも台湾総督府の役人

によって述べられ、大屯も候補地とされることになったのである。すなわち、台湾の国立公園選定に際しては、(亜)熱帯の環境論という内地とは異なる論理が介在することで、鷺鑾鼻のような熱帯風景地は排除され、大風景ではなくても都市に近いということで大屯という山岳地域が国立公園に選び出されていたのである。

また、観光客誘致のために注目されていた鷺鑾鼻は国立公園に選定されなかったが、国立公園に選定された三カ所はすべて観光振興を意図して地元で国立公園指定を目指した運動が行なわれていた場所であった。そのため、早坂一郎が自然保護のために次高タロコと新高阿里山の間の手つかずの森林域の保存を主張したものの無視されることとなり、山岳の中でも観光地として考えられるところが国立公園に指定されたということが確認された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 神田 孝治「熊野の観光地化の過程とその表象」国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、2010、vol.156、pp.137-161.
- ② 神田 孝治「吉野熊野国立公園の指定と熊野風景の変容」和歌山大学観光学部設置記念論集、査読無、2009、pp.99-113.

[学会発表] (計 4 件)

- ① Koji KANDA “Holy place and imaginations: A case study of Ise Shrine in Japan” The 5th EAST ASIAN REGIONAL CONFERENCE IN ALTERNATIVE GEOGRAPHY (in Seoul, Korea ), 2008 年 12 月 14 日.
- ② 神田 孝治「国立公園風景の再考」人文地理学会 第 111 回歴史地理研究会 (於: 京都大学), 2008 年 8 月 26 日.
- ③ 神田 孝治「観光政策の変容と熊野の表象」日本地理学会秋季学術大会 (於: 熊本大学), 2007 年 10 月 6 日.
- ④ 神田 孝治「戦前期から戦後期における和歌山市の観光地化とその変容」日本地理教育学会 (於: 関西大学), 2007 年 8

月 5 日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神田 孝治 (KANDA KOJI)

和歌山大学・観光学部・准教授

研究者番号 : 90382019